

## 連載

【試論】民族総福音化への道 (7)  
先ず早天祈祷から⑦副総裁兼事務局長 手束 正昭  
(高砂教会牧師)

これ迄私は、早天祈祷の意義と力について書き綴ってきた。それは日本民族総福音化を達成していくためには、韓国のように、日本のどの教会に於いても早天祈祷が行われることが不可欠であると確信するからである。しかしながら、私が伝道旅行に行く先々に於いて「早天祈祷を始めましょう」と訴えると、それに呼応して早天祈祷を始めようとする教会や牧師は多く起こっているが、これを実際に始めて継続するようになることはそう簡単ではないようだ。それ故に、ここでは、どのようにしたら早天祈祷を継続的に励行できるようなになるかという具体的な「手引き」を書いてみたい。早天祈祷を自格的に始めてみたい、あるいは始めようと願っている方々の参考になれば幸いである。

一、先ず決心をすることである。誰も来なくてもひとりでもやる、と決心することである。前にも書いたが、一九七五年に私の教会で聖霊降臨の出来事が起こって約三ヶ月ぐらいの期間、圧倒的な聖霊の満たしの中にあった私は、極自然に四時頃に目が覚め、極自然に起きて、極自然に二、三時間祈ることができた。しかし、やがて聖霊の満たしの力の減退と共に、早天祈祷もまただんだんと沙汰やみとなった。何が何でもやり遂げるという意志的決心がなかったからである。聖霊の働きと助けに依存していたからである。

このようにして一度失敗した早天祈祷の励行をもう一度再開したのが一九八〇年の教会分裂に際してであった。立つか倒れるか、勝つか敗けるか、という人生最大の危機の中で、四時頃になると自然に目が覚め、

起きて祈った。搾り出すように懸念に祈った。二週間後、主の語りかけの言葉を聞いた。「あなたは勝利する」。やがて主の言葉通りに危機は去り、それと共に早天祈祷も途絶えていった。早天祈祷を必ず貫徹するという意志的決断をしなかったからである。

それ故に、早天祈祷を励行するためには、「死んでもやる」という決意が必要である。そしてこの事を公にすることである。そうするならば、必ず何人かの信徒達はこれに呼応してくるのである。

二、早天祈祷を励行するためには、現代人の陥りがちな「夜型生活」を変換することである。昔の人のように「朝型生活」に改造することである。朝早く起きるためには、早く眠るようにしなくては、早天祈祷は続かない。私達の教会のある姉妹が作った「教会川柳」がある。「朝寝坊、早天祈祷で、昼寝ぐせ」。思わず笑ってしまった川柳であるが、「昼寝」のできる人は専業主婦ぐらいのもので、他の人々には無理である。だから、早天祈祷の絶対条件は、できるだけ早く寝て、睡眠不足にならないように心がけることにある。そうでないで継続して早天を守り続けることは困難となる。早天祈祷というのは継続して毎日続けることによって大きな力を発揮するのであって、したりしなかつたりでは効果は激減する。言わば早天祈祷というのはポテイ・ブローの祈りである。継続して祈り続けることによって、やがて大きな効果を現してくるのである。

三、早天祈祷の時間を初めから余りにも早く設定しないことである。私は先程、早天祈祷の二回に渡る挫折

について書いたが、だからと言って、全く早天祈祷会を行わなかった訳ではない。本格的な早天祈祷会を持つには至らなかったが、教役者のみが集まって七時から早天祈祷会は行っていたのである。教役者のみが事務所に集まって、七時から八時まで祈り、その後一日の打ち合わせをするということを三十年近くも続けてきた。そしてそれはそれなりに恵みとなり、力をもたらしってきた。そしてそれを土台にして、その一時間前の六時から信徒達にも呼びかけて、聖堂（礼拝堂）にて正式の早天祈祷会を持つようになったのである。そして継続して三〇、四〇人の人達が毎朝集まって祈っている。

もし早天祈祷会を五時から設定したらどうだろうか。恐らく、集まる者は今の半分以下となり、教役者達でさえ毎日の出席は難しくなっていたかも知れない。誰よりも、私自身の体もたなくなり、悲鳴をあげるようになったであろう。だからと言って、早天祈祷会の開始は六時に設定した方がよいと言っているわけではない。余り無理のない時間帯に設定し、必要に応じて徐々に早めていけばよいのである。

四、それでも尚、ついつい寝坊してしまい、早天祈祷会に出席できない場合が起こる。しかし、祈りそのものは諦めてはいけない。仮に床の中にいたとしても、そこで十五分ほど祈ることである。そうすれば、早天祈祷会欠席による恵みの喪失は、ずいぶんと補給されることになる筈である。アンシュラム運動の指導者であった故榎本保郎牧師は、いつも語っていた。「朝の十五分があなたの人生を変える」と。